

学芸員資格の課題と可能性～東京家政学院大学の博物館実習を通して

石 垣 悟*

はじめに

本稿は、令和元年度（平成31年度）に行った東京家政学院大学現代生活学部の「博物館実習」の内容と、その際に見学等を行った博物館（美術館を含む）を紹介しつつ、本学の「博物館実習」の特色と課題、そして学芸員資格の可能性について筆者なりに考えてみたものである。

東京家政学院大学では、現代生活学部の現代家政学科（千代田三番町キャンパス）と生活デザイン学科（町田キャンパス）の2学科において、博物館任用資格である学芸員資格を取得することができる。1年次前期から開講される「博物館概論」を皮切りに、1期につき1～2科目を単位修得していくことで、3年次後期までに座学を中心とした科目16単位を取得することが可能で、「博物館実習」はその総仕上げとして4年次の前期及び夏期集中で行うこととなっている。

「博物館実習」は、一連の座学系科目で身につけた基礎的な知識をベースに、実際に自らの手足を動かして主体的に博物館活動に取り組んでみる科目である。多くの大学の博物館実習は、複数回のうちの1回を、教育実習と同様に学外の博物館での実習にあてる。博物館に1～2週間、インターン的に通学するのである。これに対して本校での実習は、4年次前期及び夏期集中ともに本学を拠点に本学教員が担当する。学内で実習を完結させる点は、生活文化博物館という大学博物館を持つ本学の「博物館実習」の1つの特色といえよう。

1. 令和元年度前期「博物館実習」

さて、本年度実施した「博物館実習」の概要を紹介する。4年次前期は、計15回の授業を実施した。現代家政学科は千代田三番町キャンパス、生活デザイン学科は町田キャンパスと、別々の教室で実施したが、内容については原則、同じものとした。本年度の受講者は、現代家政学科3名、生活デザイン学科1名の計4名であった。

本学の「博物館実習」は1コマ：1、5時限（135分）となっている。各コマの基本スタイルは、最初に担当教員が実習内容の説明等を30～45分程度行い、続いて90～105分程度、実際に手足を動かしての作業をするという形をとった。前半の説明等は、作業手順の具体の解説だけでなく、博物館活動における当該作業の位置づけや意義を考えさせることも心掛けた。それは、3年次までの科目で得た基礎知識の確認・復習と再考を促すものでもある。

初回のオリエンテーションに続く2回目にまず行ったのは、資料の保存（IPM）に関する実習である。温度・湿度の計測と害虫等のモニタリングを行った。1人1台ずつ温湿度計（データロガー）を使って、表示の見方、セッティングなどを行った。害虫等のトラップは、各キャンパスの1階部分を博物館施設とみなして10～20か所に設置して、それを図面上に記載して経過観察した。特に町田キャンパスでは、生活文化博物館の展示室の内外を中心にこれを設置した。具体の設置箇所については、受講生が自ら考えて決定した。これらの温湿度計とトラップについては、14回目の授業で機器を回収してチェック・分析をした。

温湿度計は、午前0時と正午の12時間おきに、4～7月の4か月間を記録し、1日の温度・湿度の変化と、春から梅雨を得て夏に至るまでの季節ごとの温度・湿度の変化を確認し、特に湿度と資料の劣化との相関を改めて学んだ。ただ、本格的な収蔵庫での計測を行えないため、いわゆる博物館の収蔵施設や資料と温度・湿度の関係については、口頭で解説するにとどまった。

トラップは、回収後、『文化財害虫事典』（東京文化財研究所・2004年）を参照しながら害虫の特定を試みた（写真1）。ここでは施設内に多くの虫が侵入するという現実を確認することができ、その侵入防止策についても意見を出し合った。ただ、設置期間が4か月ほどと比較的長期であったため、虫の発生量や特定の虫の発生時期など、季節による変化を確認できず、

*石垣 悟（いしがき さとる）令和元年度現代生活学部現代家政学科准教授

課題が残った。

次いで3、4回目は資料の梱包・運搬と資料の展示を行った（写真2・写真3）。これは本学の生活文化博物館が文部科学省からの依頼で行った出張展示「江戸時代の食文化を今に活かす」（2019年5月7日～8月23日）に、実習生も参加して手伝うという形で行ったものである。展示資料の主なものは、食品サンプルやその器で、梱包・運搬は生活文化博物館（町田キャンパス）で、展示は文部科学省ひろば（千代田区霞が関）で、ともに両学科の合同で行った。

梱包では、食品サンプルやその器の状態を確認したうえで、薄紙や綿布団等で包んで桐箱等に入れ、車両運搬した。また、文部科学省ひろばでの展示は、梱包を解いて資料の状態をチェックした後、パネルの設置と併せて行った。展示終了後、文部科学省ひろばの他の展示も見学し、その良い点と悪い点を各自で考察した。

5回目は、梱包運搬と展示について復習的に講義した後、実際の梱包・展示作業についての質疑応答や意見交換を行い、さらに文部科学省ひろばの展示に関する問題点や改善点などについての意見交換も行った。

6回目以降は、拓本2回、写真撮影1回、実測図作成1回をそれぞれ行い、その間に相模原市立博物館（神奈川県相模原市）、世田谷区立次大夫堀公園民家園（東京都世田谷区）、羽村市郷土博物館（東京都羽村市）の3館を視察した（6～12回）。拓本は、2回に分けて行い、最初の回は屋内での乾拓と湿拓で、2回目は屋外での湿拓とした。屋内の拓本では、生活文化博物館の所有する柄鏡を利用した。屋外での拓本では、現代家政学科は新宿区富久町にある「東京家政学院発祥の地」の拓本を行い（写真4）、生活デザイン学科はキャンパス正面入口にある「大江スミ先生」の碑の拓本を行った（写真5）。写真撮影は、簡易的な撮影台を設置し、冊子・文書類と立体物の撮影をそれぞれ試みた。実測図作成は、写真撮影した立体物を利用し、写真をトレースしてから計測値を書き込む方法で行った。徳利などを実測し、実測図からその容量（概数）を計算するなど、実測図を単なる記録に留めず、情報獲得の一手段として利用する可能性も学んだ。ただし、既存設備等の制約から、簡易的な実測図作成として近年用いられつつあるデジタル画像を加工しての実測図作成は、今回は行えず課題を残した。

この間に行った3つの博物館施設の視察では、いずれも各館の学芸員の方から、展示のみならずバックヤードまで可能な範囲でご案内いただき、最後に30分程度の質疑応答の時間も設けていただいた。相模原市立博物館の兼杉千秋館長、加藤隆志学芸員、山本菜摘学芸員、

世田谷区立次大夫堀公園民家園の市村真実学芸員、羽村市郷土博物館の河村康博館長の各氏には、この場を借りて改めて謝意を表したい。実習でこの3館を選んだのは、いずれも学芸員が常駐して恒常的かつ積極的な活動を行っている施設であったことがある。加えて、都道府県・政令市クラス、市町村クラス、野外博物館と、地域博物館にも多様な規模・形態があり、それぞれに長所・短所があることを知るためでもあった。（写真6、7、8）

13回目の授業では、この3館の活動を比較しての意見交換を行った。14回目は、先に触れたように温度・湿度のチェック、害虫モニタリングの同定などを行った。最後の15回目は、実習で学んだこと全体についての感想と質疑応答を行った後、夏休みに集中実習を行う陸前高田市立博物館の概要と、博物館・文化財と災害について講義した。

2. 夏季集中「博物館実習」

夏休み期間中の「博物館実習」（集中）については、本年度は8月5日（月）～9日（金）の日程で、岩手県陸前高田市にある「（仮設）陸前高田市立博物館」を会場として行った。この博物館は、「仮設」と銘打たれているように、2011年3月の東日本大震災による大津波で壊滅的な被害を受けた。勤務していた学芸員も亡くなるなど、被災地に立地する博物館施設の中で特に大きな被害を被った施設である。震災後、様々な機関の援助を受けながら、資料の救出、修理、整理を実施してきており、その作業は現在もなお続いている。現在の施設は、市内の内陸、旧生出小学校の建物を改修・利用しているもので、展示室等はなく、資料の整理・修理に特化した活動を続けている。展示室を具備した正式な博物館施設については市街地の嵩上げ地区に建設を計画中である。

今回の博物館実習は、本学が陸前高田市より研究委託を受けるという形をとり、実習生4名と担当教員のほか、生活文化博物館学芸員1名、現代家政学科の教員4名も参加した。

初日（5日・月）は、旧市街地の被災後の現状を視察した後、博物館にてご自身も被災された熊谷賢学芸員より、被災後の博物館活動の実際について詳細に講義いただき、次いで収蔵庫などのバックヤード、現在の修理・整理作業を見せていただいた（写真9）。

6、7、8日の3日間は、浅川崇典学芸員の指導のもと、被災資料の脱塩作業を手伝ったほか、資料の清掃や分類、計測なども行った（写真10、11、12）。8日午後には、熊谷学芸員、大久保裕明館長との質疑応答を行った。両名には丁寧に応じていただいた（写真13）。こ

の場を借りて改めて謝意を表したい。また、期間中の7日（水）の夜には、この地域に伝承されてきた七夕行事（岩手県指定無形民俗文化財）を現地視察し、地域の伝統行事のあり方についての理解も深めた。なお、8日（木）には読売新聞岩手支社による取材も受けており、8月27日付で記事にさせていただいている。

最終日（9日・金）は、午前中に宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館を視察し、萱岡雅光学芸員より展示室やバックヤードをご案内いただき、質疑応答に対応いただいた（写真14）。感謝申し上げたい。この美術館もまた被災地に立地した施設であるが、高台に立地していたため大津波の直接的な被害からは逃れている。いっぽうで、震災前から津波に関する企画展示を行うなど震災への意識は高く、震災後の館の活動は迅速で、瓦礫を含めた多くの被災資料を積極的に収集して展示するなどの活動を継続的に行っている。特に瓦礫を「被災物」と称し、そこにある種の意味づけを行うことは、学芸員ならではの対象認識といってよく、被災地に立地する施設が震災とどう向き合っていくべきか、について一つの方向性を示してくれているように思う。また、展示されている被災物についても、露出展示とするだけでなく、保存に拘泥せずに時間の経過とともに朽ちていく様をそのまま展示し続けているなど挑戦的な展示となっている。震災後の写真についても、単に展示するだけでなく、そこに想像されるストーリーを学芸員による解説で示すなど、賛否両論はあるだろうが、震災のリアルさを真剣なまなざしで伝えようとする館の姿勢が明白にみられる。こうした点は、この施設が博物館的な機能/実態的に伝える、とともに美術館的な機能/象徴的に伝える、を併せ持っていることに遠因するのかもしれない。

さらに、9日午後は浅川学芸員と合流し、陸前高田市気仙町字湊にある「津波記念碑」の拓本をとり、これを陸前高田市立博物館に寄贈した。（写真15）

今回、被災地で実習を行った4名の受講生は、いずれも震災当時は中学生であり、被災地に居住していたわけでもなかった。東日本大震災については、映像等で記憶していても実感として関わってきた世界であったとはいえない。そうした中で、短期間ではあったが、また現地はそれなりに復興も進んでいるとはいえ、現場の空気を自身の肌で感じとったことは、博物館活動の地域社会における役割や意義を理解するためにも極めて意義のあることであったと考えている。

3. 博物館実習の課題と今後の取り組み

本年度の実習は、4月に赴任したばかりの担当教員

にとっても初めての経験であり、手探りで行ってみた面も強かった。そのため問題や課題も多かったと認識しており、同時に博物館実習の在り方や学芸員資格の意義などについて改めて考えるきっかけにもなった。

まず、今回の実習では取り組めなかった課題としては、燻蒸と普及活動がある。前者については、IPMの観点から温度・湿度の計測や害虫モニタリングと併せて口頭で説明するに止まった。見学先の施設でも燻蒸室等を見せていただいたが、実際の作業に触れる機会はもてなかった。一昔前であれば、臭化メチルを用いたガス燻蒸は、実習の内容としては不適切であったが、IPMの理念のもとでの炭酸ガス（二酸化炭素）を用いた燻蒸作業については、実習でも十分行える余地があるのではないかと考える。もちろん、これとても慎重に行う必要があり、若干の設備も要するが、包み込みで簡易的に行う形の二酸化炭素燻蒸の実習を次年度以降は検討していきたいと考えている。

博物館の交流普及活動については、展示作業までは行ったものの、それをより深め、また観覧者によりわかりやすく伝える展示解説や体験学習を試みるまでには至らなかった。また、写真撮影と実測図作成についても、必ずしも現在の水準では行い切れていない。これについても早急に関係設備を整え、「使えるスキル」としての撮影や実測図の習得を進めたい。

いっぽうで、夏休みの集中実習には博物館実習の大きな可能性が内包されていると感じている。今回のような自治体の活動との連携・協力は継続的に模索していきたい。全国の多くの自治体は何らかの形で地域博物館的な施設をもっている。また、施設をもっていなくても市民から寄贈された資料を少なからず保管している自治体がほとんどであろう。これらについては、整理が進展せずに廃棄される事例もみられる。最終決断は所有者に委ねられようが、それでも判断は整理を経た後になされるべきで、整理できないから廃棄という思考は決して許されないだろう。そうしたとき、本学の集中実習のような活動の果たす役割は大きいと思われる。今回の集中実習でも、450点余りの資料群について清掃、分類整理、リスト作成まで行った。期間中できることは限られるが、学生が、大切な資料を後世に保存・活用する基礎作業に貢献する余地は大きいと思われる、本学としてもこの活動を広く進めていきたい。

おわりに～学芸員資格の可能性

もう1つ検討しておきたいのは、博物館任用資格としての学芸員資格を取得した卒業生の進路である。残念ながら、本学を卒業し、すぐに学芸員として採用さ

れる環境は現実的には整っていない。要因は2つある。1つは、学芸員の公募では通常専門分野が求められ、その多くが歴史、考古、民俗、美術などである点がある。つまり、家政学の学芸員という募集はほとんどない。もう1つは、学芸員資格の有無を採用で問う職種の9割以上は、博物館の募集に限られるということである。これらは、そもそもこの資格の趣旨から当然でもあるが、いっぽうでこれが学芸員資格の社会的メリットを矮小化させているようにも思われる。逆にいえば、一般企業の採用条件に学芸員資格の有無を問う姿勢をもってもらう、そのために博物館を超えたところでの学芸員資格の社会的意義を論議し啓発していく必要があるように思われる。

これに関連して本学のメリットとして発信すべきは、現代家政学科、生活デザイン学科ともに学芸員資格とともに、2級建築士の資格も取得できる点であろう。類似のパターンに教員資格と学芸員資格の同時取得がある。従来これはある種の優位性をもっていた。つまり、教員として採用された後、博物館勤務となった例も少なくなかった。博物館が社会教育施設として位置付けられ、教育委員会の所管にあったことも背景にある。本学でも教員資格と学芸員資格の同時取得は可能である。

しかし、近年、この様相は大きく変わりつつある。2018年の「文化財保護法」改正と、それに伴う「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正により、文化財の所管部署を教育委員会以外とすることが正式に認められた。文化財担当部署を教育委員会以外におく自治体は確実に増えつつある。中でも、町づくり・地域活性化・観光の部署に設けられることが多く、当然ながら今後は博物館もこうした部署の所管となる例が増えていくだろう。こうなると教員資格と学芸員資格の組み合わせの優位性は失われる。新たな優位性は何か。その1つが、学芸員資格と建築士の組み合わせであろう。町づくりの現場で伝統的な建造物を改修・利用して資料の展示等を行う活動は増えてきており、そこでの2つの資格の意義は極めて大きくなるはずである。しかも、この組み合わせで資格を取得できる大学はそれほど多くない。文学部系の大学では学芸員資格は取れても建築士はとれない。逆に建築学系だと建築士を取れても学芸員資格は難しい。もちろん双方の取得には、多くの科目の履修が必要となって負担は増えるが、そのキャリアの社会的意義は極めて大きいと思われる。学芸員資格の取得をこのような点からみるならば、本学の学芸員資格の可能性は大きく広がっているというべきで、担当教員としてもこれを念頭に今

後の博物館実習に取り組んでいきたいところである。



写真1 害虫の同定

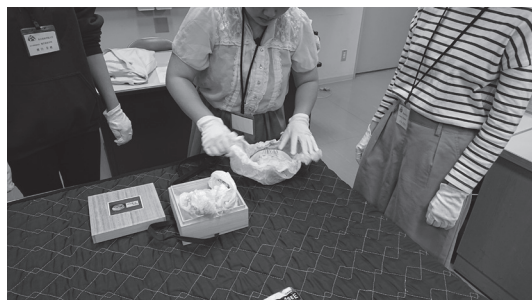


写真2 資料の梱包



写真3 展示作業 (文部科学省ひろば)



写真4 「東京家政学院発祥の地」の拓本



写真5 「大江スミ先生」の碑の拓本



写真6 相模原市立博物館の視察



写真11 資料の整理分類（陸前高田市立博物館）



写真7 羽村市郷土資料館の視察



写真12 資料の脱塩（陸前高田市立博物館）



写真8 次大夫堀公園民家園の視察



写真13 報告と質疑応答（陸前高田市立博物館）



写真9 熊谷学芸員の講義（陸前高田市立博物館）



写真14 リアス・アーク美術館の視察



写真10 資料の収納（陸前高田市立博物館）



写真15 津波碑の拓本